卓　　話

平成 22 年 3 月 23 日

『大垣の工場誘致』

大垣市史編集室 室長　清水 進様

一、明治初期の産業

・士族就産の概況（明治十五年　公文別録）

大垣士族の如きは藩政改革の際、減禄の甚しからざるより、他士族に比すれは資産を有する者多く、方今生活上に非常困難の状少しとす、殊に近来興産事業に意を傾くる者多く、大垣町へ綿糸紡績所を設立し、厚信社と称す、又織物を以て業とする友愛社を設け、士族の婦女をして従事せしめ、製品は売捌所を置て委託販売せしむ、社の株金は一株を十円と定め、五ヶ年を一期とするの結社なりと云

・日之出新聞報道

士族大屋恭蔵が西濃に産繭の多いことと士族の娘たちが徒食していることに着目し、絹糸製糸を創始しようとした。先ず大屋夫妻が士族の娘数名を連れて富岡製糸場へ赴いた。年を経て技術を習得し帰ってきたが、資金難等のため工場設立は容易でなく、その後、戸田鋭之助等の協力で明治十九年に設立した。これを見て金森吉次郎が金森製糸を創設し、続いて各地に製糸場ができた。製品は非常に良質で、大垣城にちなんで鹿の商標を付け、横浜へ売り出したが、値段も高くよく売れた。しかし品質本位で利益をあまり考えなかったので、採算は損失であった。その上明治二十一年の出水で工場が倒壊し、漸く復旧すると二十四年の大震災で再び倒壊し、工女圧死の惨事を生じた。その後、明治三十年頃遂に事業を中止し、西濃地方では悉く失敗したのは甚だ遺憾である。

二、勧業と産業基盤

・大垣町発展策（明治三十二年　大垣実業協会会報）

我が大垣町は商業・工業何れにも最適当の土地なるにも拘らず、寸進尺退遂に救ふ可らざるの悲境に墜落し居れり、殊に工業の如きに至っては、晨星も啻ならざる有様なるが、元来当地は労働賃銀の比較的低廉なる、地勢の好位なる、地方に競争の幣少き事等、一も起業に不適当と認むべき理由なし、ただ水災の障害を被る甚しと雖も、三川分流の機また近からんとせば、以て心を安んずべきなり、況や工業の振興を見るあらば、其土地の享受する利益は勘少ならず、地方繁栄期すべきなり、大垣町は商業より寧ろ工業地として適当なる土地なるべし云々

「大垣に近代工業発展の天佑・地利・人和の三要素あり」

・関ヶ原・大垣間鉄道布設の儀稟請

元来関ヶ原・大垣間鉄路の如きは、越前の海港より尾勢の間を横截し、敦賀・四日市間の連絡を通し、次に大垣より岐阜に布線し、更に分れて両岐となり、一は延ひて名古屋に至り、又一つは中仙道の線路に応し、以て大に運搬の利便を挙くるの目的に出てたるものとす、而して此線の工事漸次功を呈し、今正に関ヶ原に達するに至れり、然れとも猶一歩を進めて大垣に至り、舟楫の利に依り、以て四日市に通するに非るよりは、其運輸の便宜を充分ならしむ能はす、僅々四里有余の工事にして、忽ち南北両海を連接せしむるに至るの

大利を措き、之を座視する如き、固り策の得たるものと云う可らす

明治十六年五月十七日　　井上鉄道局長

工部卿代理　山縣参事院議長殿

・濃勢汽船会社の設立（明治四十二年一月　海津郡報）

会社は資本金五万円の株式組織にして、揖斐川を通じて桑名・大垣間に汽船を巡航せしめ、乗客貨物の運搬を営むを目的となし、廿嶋内外の汽船六隻を設備し、大垣船町及び桑名川口より毎日三回宛発船せしむる計画なりと、而して其間に於ける宿泊所左の如し

水門・福束・根古地・今尾・高須・山崎・太田・油島（以上美濃）

今島・桑名（以上伊勢）

・明治三十六年陳情書（大垣商工会議所史集録）

全国中、三陸の北上川に優るも劣るなきものにして、其航程十里に達し、海潮六里以内に浸入し、水勢平順、全国無比の良航路なるは、世の知る処なり、殊に北陸線並びに東海線官設鉄道に接し、伊勢海港湾に連り、水陸連接日本全土を中断し、即ち南北両海を一貫し得て、其の間上下貨物の交通頻繁多大なり

三、工場誘致

・戸田鋭之助の懐古談（後藤毛織会社の誘致）

「大垣は水害と地震の名所だからだめだと」とあって、どうしても大資本を投下するものがない。こうした処へ決定されたのが、後藤毛織会社大垣工場の設置である。大垣の喜びは大したもので、甦生の思いで努力した。私も同社が魁となったことを感謝した。大垣の地下水が工業用に適することに着目して決定されたので、大垣では土地の買収斡旋、溝渫その他敷地内の公用地の廃止処分を引き受けた。後藤社長は江戸っ子で算盤の細かいところもあったが、大いに話すに足る大腹者だった。

・養老鉄道開通（全線開通大正八年　電化は大正十二年　日之出新聞）

四日市と大垣とを鉄道で結び付けたいと運動を起こし、大垣では安田和助・田中清兵衛・戸田鋭之助らが国防関係もあり陸軍省を動かし、当時鉄道局長であった松本荘一郎氏の尽力で認可された。これが明治二十七年であった。しかし、布設が遅れ、再び四日市の井島茂作氏らの活動により、立川勇次郎氏の手で着手となった。安田善次郎氏も共鳴され、其の後援で会社が創立された。

・大垣市事務報告書（昭和九年）

工場の招致は本市多年の懸案たりし所、両三年来挙市一致万難を拝し、各方面に猛運動を持続し、酬いられて左記四大工場の新設を見、何れも敷地三万余坪、市勢躍進目覚しく工業都市としての全貌を整えんとしつつあり

若林製糸大垣工場（笠縫地内）

大日本紡績西大垣工場（木戸・久瀬川地内）

新興毛織第二工場（藤江・三城地内）

岸和田紡績大垣工場（南杭瀬地内）

四、軍需工場への転換

・米国戦略爆撃目標資料（一九四五年、コロラド州デンバー法務省）

大垣は中規模の重要な工業都市である。大垣は航空機の部品・軍需品・化学製品・工作機械・軽合金・鉄製品を現在も操業している。名古屋とその近辺の大工場施設、もしくは大阪や他の工業地帯の大企業に供給している。大垣は人口五六一一人でペンシルバニア州チェスターと同様の規模の都市である。市内を流れる水門川は揖斐川の支流であり、市内の運河や小さな河川とつながっている。水田地帯には多くの曲がりくねった川が流れている。最大は揖斐川で、船舶の航行も可能である。複線の鉄道である東海道線は大垣の北部に敷設されている。大規模な工場群は住宅地域や商業地域の外側にある。運河沿いの街路は防火帯の役割を果たしている。

揖斐川電気木戸工場（アルミ製品を製造）

大垣鉄工製作所（航空機部品・工作機械製造）

揖斐川電気北切石工場　日本合成　日本特殊金属（市の北部だが未確認）

岡本飛行機製作所垂井工場
日本紡績（飛行機部品に転換可能とかんがえられる）
大日本化学（航空機用ガソリンであるブタノール製造）
損害の概要（一九四五年八月二十一日）
市街地（住宅地域）の割合四二％、（工業地域）三二％、揖斐川電気木戸工場一〇％、大日本紡績二〇％、大日本化学五〇％、中央毛織八〇％、新興毛織八〇％、名称不明の工場九〇％
添付資料　米国陸軍地図部の大垣地図、爆撃前の写真（一九四五年三月三十一日・八月五日）、爆撃後の写真（八月十五日）
認可ミルトン・ダービイー航空軍少佐

五、地場産業

・石灰工業（美濃赤坂誌）

赤坂に於ける石灰業は安政三年長浜の梶田嘉助なるもの字大久保に焼窯を築造して始まる、失敗に帰す。その後矢橋宗太郎氏は法泉寺裏手に試みるも失敗に帰す、明治十四年荒川の安田武八郎氏、石灰製造株式会社を経営、英国式焼鉱炉に改め一新紀元を開き、皇居造営・東海道線布設に際し、鉄道局に石灰納入、その後、十六の坂井吾一氏、同社を譲り受けるが遂に成功せず、

明治二十二年、横浜の豪商高島嘉右衛門氏、セメント会社を興さんとし石灰を求め、矢橋敬吉・矢橋徳太郎・矢橋友吉の三氏、金生山商店を組織、工場への新道を開き、船舶出入りの繋留場として池を設ける、日々八十貫以上算出、明治二十三年東京の第三回内国勧業博覧会にて一等賞授与、爾来、肥料石灰として信用を博す、

明治二十七年、金生山商店閉鎖するや、業者増加し粗製濫造、明治二十九年石灰組合設立、しかし組合員対立し解散、日露戦争後も粗製濫造、大正年間には欧州戦乱にて石灰値段騰貴、工業用石灰の需要を増し、活気を呈す、

・大理石工業（美濃赤坂誌）

大理石小細工業は天保初年に彫刻巧みな谷鼎氏（市橋村の庄屋なりしも当町へ移住）始める、氏は硯、文鎮、動物の形態等を彫刻して称賛を得、遂に雲根堂と号して商舗を開く

その後、業者増加し、参勤交代する諸大名、付き添いの武士、旅客に珍重せらる、

王政復古となると、武士・旅客の通行やみ本業は衰勢をきたす、しかし、明治十三年、石陽組合を設け、香炉・花瓶・床置等意匠に意を注ぎ、明治二十三年、第三回内国勧業博覧会に出品し、賞牌を受ける、明治二十八年、矢橋亮吉氏、擬珊瑚を発明し、産額増加、

建築用大理石は明治三十四年、矢橋亮吉氏が広き工場を造り、西洋式床面の敷石、腰壁、窓口、ストーブの前飾り等を製作、以降、発展す、

・陶器業（美濃赤坂誌）

文政の頃、赤坂町に清水孫六なる者あって楽焼を製作、これ当町の陶器業の起源也、高須候の知る所となり高須に移る、その頃、清水平七、叔父孫六から技術伝授され、嘉永二年金生山の赤土と勝山の白土とを混合せば陶器に適するを発見、勝山焼と称す、大垣候の知る所となり徳川家への進物の御用を賜り、帯刀を許さる、のち御勝山温故と名印、平七を温故と改名せり、